

都市及び地域環境の安全性・快適性に関する研究 (その1) Study on the safety and comfort of city and community environments (Part 1)

—高齡者等の生活圏の構造に関する研究—

- Study on the elderly's living environment structure -

生島一明

Kazuaki Ikushima

Abstract :

Now that the aging society is here, there will be a higher percentage of people aged 65 or older. Along with this is the issue of care giving and improving welfare facilities. There are expected to be a variety of lifestyles for the elderly, with some leading an active life with work and community and some living the rest of their lives retired on pension.

It is now evident that some elderly want to return to the city, some participate as productive members of society while some engage in farming in rural cities. With such a variety of lifestyle possibilities, the elderly may now be involved with the community in a whole new way.

To build a community today by taking the above situation into consideration, we will need to know how the many active elderly people lead their lives in the community, how they make use of the community environment and how they evaluate it.

In this study, by examining how the elderly make use of their community and what they think of the community, as well as the relationship between their lifestyle, sense of living and community, we propose a community structure that enables one to stay on to live.

1. はじめに

高齡社会を迎え、65歳以上人口の割合が高くなっていく。これにともない高齡者の介護問題や福祉施設の充実が課題となっているが、仕事や社会的関わりをもちながら生活する人や年金でゆっくり余生を送る人など、多様な高齡者像が想定される。

表 1. 調査対象者

	男性(年齢)	女性(年齢)	単身者	夫婦2人暮らし	子供と同居
篠山市(11名)	7名(70~81歳)	4名(74~83歳)	6名	5名	
明石市(9名)	6名(71~89歳)	3名(65~78歳)	3名	4名	2名(但し生計は高齡者のみ)
尼崎市(10名)	7名(69~85歳)	3名(63~78歳)	3名	7名	

また高齡者の都心回帰志向、社会活動への参加、地方都市での農業など、様々な生活の可能性が事例的に現れてきており、そこから新しい「まち」との関わりを生み出す可能性がある。

このような状況を踏まえ、これからのまちづくりを考えていくには、多くの元気な高齡者が、地域でどのような生活を送り、地域環境をどのように使い、どのように評価しているのかを知ることが必要である。

本研究では、高齡者のまちの使い方やまちの意識、生活スタイルや生活感と地域との関係を通して「住み続けられるまちの構造」について提案を行う。

2. 研究の目的・背景

1997年度の生活圏調査では、高齡者の地域環境の使い方や「まち」の認識範囲を調査し「まち」のまとまりを考察した。

高齡社会を迎えた現在、介護に必要な高齡者は86万1000人で人口1000人当たり49.3人¹⁾であり、社会を構成する高齡者の大部分は「元気な高齡者」であるといえる。(図1)「元気な高齡者」は地域での生活時間が長く、積極的に「まち」を利用していると考えられる。よって1997年度の研究をもとに、具体的に高齡者の生活事例をヒアリングすることにより、日常的な行動を通してまちの構造を調査し、生活圏の地域特性について考察する。

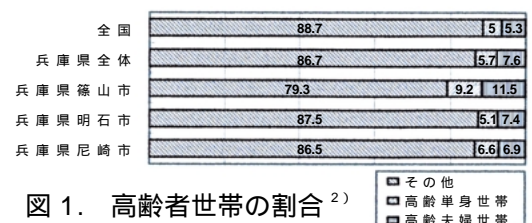


図 1. 高齡者世帯の割合²⁾

表2. 主におしゃべりをする場所・場面（頻度 1/Month 以上）

	場所			場面		その他
	住まい・周辺	施設系	空間系	まちの中	まちの外	
S-1		友達の家・図書館・郵便局		青山大学・史友会	健康講座・文化講座・調理のボランティア・短歌	手紙
S-2		友達の家・病院・食料品店K・宝塔寺	道端	青山大学・史友会・文化教室（陶芸）・障害者センターでのボランティア		電話
S-3	自宅（友達が遊びに来る）・友達の家	魚屋S		青山大学・歴史美術館友の会・ランドゴルフ・老人会食事会・障害者センターでのボランティア		
S-4	自宅庭先		道端	文化教室（古文書の会）・ランドゴルフ	健康講座・文化講座	
S-5	隣近所		道端	文化教室（古文書の会）・歴史美術館友の会・観光案内ボランティアの会合/研修・観光案内のボランティア	水墨画・文化講座・男性料理教室	
S-6		友達の家		障害者センターでのボランティア・ゲートボール		電話
S-7		旧職場		古文書講座・ランドゴルフ		
S-8	自宅（店先）・隣近所	古陶館・古美術O		民謡会（舞踊）・商売		電話
S-9	自宅（店先）	市民会館・大正ロマン館		商売	仕入先	
S-10	自宅（隣近所の人が遊びに来る）			史友会・歩こう会		電話
S-11	自宅（店先）	魚市場（仕入先）		海軍友の会・商売		電話
M-1	畑・花壇	独居高齢者宅の訪問	松ヶ丘公園	将棋・カオキ・創価学会会合	高齢者大学	電話・散歩
M-2	自宅（近所の人が遊びに来る）		朝市・住棟間・道端	カオキ・老人会会合・手芸の会		電話
M-3			松ヶ丘公園	将棋・カオキ	カオキ	散歩
M-4	自宅・畑・花壇	娘宅		カオキ・老人クラブ会合・創価学会会合・創価学会の友達との行き来		
M-5		明石総合福祉センター		老人会会員との連絡		
M-6					カルチャー教室（甲南大学）	電話
M-7	隣近所			老人会会員との連絡	高齢者大学	
M-8					テニスクラブ・テニス・元会社の同僚と飲みに行く	
M-9					高齢者大学	
A-1	隣近所	知り合いの家・銭湯				
A-2	隣近所・自宅			体操教室		
A-3	隣近所・自宅					
A-4	隣近所	スーパーC			カルチャー教室（英会話）	
A-5	自宅（知り合い・隣近所が訪ねてくる）	病院		茶道・老人会会合	スミシング	
A-6		銭湯・病院		ゲートボール・老人会会合		
A-7	自宅（知り合いが訪ねてくる）	水明公園（電車の中）・銭湯・病院	道端	書道		電話
A-8		病院		カオキ	カオキ	
A-9	自宅・隣近所		道端	創価学会		
A-10	自宅（知り合いが訪ねてくる）・友達の家		道端	民謡	三味線	

3. 調査方法

1) 対象地区

まちの形成過程や環境特性の異なる3地区； 篠山地区（兵庫県篠山市：城跡・堀を中心とした歴史的市街地）、明舞地区（兵庫県明石市松ヶ丘：約30年前に開発された初期のニュータウン）、尼崎地区（兵庫県尼崎市大庄中通：文化住宅・アパート・長屋の多い住宅密集地域）を対象とした。

2) 方法

前回の調査1)においてインタビュー調査に応じてもよいと回答した高齢者を中心に、各地区の老人会の会長を通して、調査を実施した（表1）。篠山・尼崎地区では、居住年数40年以上の者が大部分を占める。明舞地区の戸建地区では全員、30年であるが、団地地区では5～30年とばらつきがある。

調査は、行動（平均的な1日の流れ：買物・散歩など）、趣味・活動・旅行、コミュニケーション（友達・近所づきあいなど）などの質問を中心に、1999年11月～12月に個別に、2時間程度のインタビューを行なった。

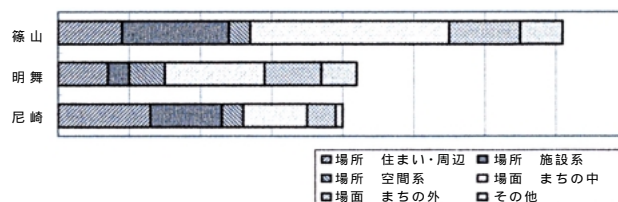


図2. おしゃべりをする場所・場面

4. 生活スタイルと地域との関係

1) 日常会話

表2に個人が日頃、会話をかわす要素を示す。図2はその数をグラフ化したものである。日常会話すなわち、おしゃべりに関する要素を場所と場面に分け、さらに場所を自宅周辺・隣近所、施設系、空間系に、場面をまちの中と外に分けた。ここでまちの内外の境界は1997年度の調査・研究によるものとし、要素は月1回以上の頻度のものである。

篠山地区ではおしゃべりの場面が他の地区よりもはるかに多い。自宅・隣近所以外の場所（施設）では本来とは異なる使い方をしている例が他の地区よりも多くみられ、まちや施設の使い方が多様・多元

的であることがわかる。住民は買物や通院などの、ついでのちょっとした会話を楽しんでいる。また、商売を営んでいるS 7～S 11では店先でのやり取りを通して地域とのかかわりを深め、それ以外では地域主催の活動に積極的に参加し、コミュニケーションを図っている。友達・知り合いは自宅・隣近所の付き合いにとどまらず、まちの中に広がっている。まちの中で人とのかかわりを持つ機会の選択肢が多く提供されており、家への引きこもりを防いでいる。

明舞地区では隣近所の付き合いが他の地区に比べて少なく、会話の機会も少ない。その中でも団地地区では集会所が大きな役割を持っており、住人が気やすく集まる場を提供し、知り合いをつくる機会を生み出している。集会所での集まり・交流を楽しみにしている住民は多い。その結果、場所・場面とも戸建に比べてまちの中でのおしゃべりの機会は多くなっている。ニュータウン入居当時は、付き合いのわずらわしさがなかったことを魅力に感じていた戸建地区の住民も、加齢と共に近所づきあいの必要性を感じ、顔見知りになることを目的に戸建地区内での様々なイベントを計画しはじめている。

尼崎地区では、自宅・隣近所での会話が占める割合や、道端で話し込むことも多いのが特徴である。回答者の居住年数が長いこと昔からの知り合いが多く、また住宅密集地であるこの地区は、玄関を1歩出ると顔を合わせる機会が多いため、玄関先などでの会話が頻ると考えられる。この隣近所との付き合いの密接さを、まちでの暮らしやすさの1つとしてあげている人は多い。地域主催の教室はこの地区の高齢者人口に比べて定員が少なく、参加することが難しいという意見があった。少子化に伴う小学校の空き教室を利用するなど、地域の高齢者のニーズへの対応が必要である。

各地区の特徴は1997年度の調査・研究の他人との会話の結果とよくリンクしている。篠山地区では地域主催の教室や会が開かれる公民館が、近所づきあいが希薄で互いの行き来が少ない明舞地区では、偶然出会った顔見知りにあいさつ程度の会話を行うため道端が、それぞれ高い割合を示していたと考えられる。尼崎地区で高い割合を示していた喫茶店はインタビュー調査ではそれほど頻度は高くなかった。これは尼崎地区に公共空間が少なく、多くの人数で集まる町内会、老人会の会合などでは喫茶店を使用することが多いため、前回の調査では喫茶店が高い割合を示したが、今回の調査では日常的な会話を行う場所を中心に調査したため、喫茶店の使用頻度は低かったと考えられる。

2) 趣味・活動 (図3)

日常的な他人との会話と同様に、篠山地区で最も活動的に動いている。地域主催・地域かかわり型の趣味・活動が最も多く、積極的にまちを利用していることがわかる。また地域内の高齢者のみを対象としているものだけでなく、幅広い対象者を認めている教室・会などにも積極的に参加している。個人が複数(かなり多く)の教室・会に参加していることも特徴的である。

明舞地区では他人との会話と同様、団地地区と戸建地区で特徴が異なる。団地地区では集会所を利用し、カラオケの会、将棋の会、親睦会がそれぞれ週1回開かれ、また、有志で住棟間の花壇づくりをしており、住民は交流を図る機会を持っている。今回の調査の回答者はいずれかの活動に参加していた。戸建地区では地域内の活動は少ないが、地域外の活動が多いのが特徴的である。高齢者大学やカルチャー教室に週1回以上通い、地域外の知り合い・友達が多い。

尼崎地区では、他地区と比較してかなり趣味・活動への参加が少ない。これは前述したように、活動自体には興味があっても、地域主催の教室・会が少ないために容易に参加できないということも影響していると考えられる。地域(隣近所)での習慣的な日常会話が多いのに対し、活動(老人会を除く)・趣味は個人的であり他者との接点は少なく多様である。

3) 買物 (表3、図4)

買物に使用する交通手段は、図4に示すようにどの地区においても徒歩は多いが、篠山地区では自動車、明舞地区ではバスが多く、尼崎地区では徒歩と自転車で9割近くを占めているのが特徴的である。

篠山地区では少量でも購入でき、歩いて行ける気安さと、客同士の会話を楽しみに近所の個人商店を利用する人が半数近くいる。しかし、店主の高齢化から近々閉店する予定の商店もあるようで、自転車を利用しない回答者は、まちの中で困ることの1つにあげていた。自動車を利用する回答者のほとんどが駐車場を持つ大型スーパーを利用しているが、まちの中にこれらが立地しているため、徒歩や自転車によっても同じ大型スーパーを利用している。他地区に比べて利用店舗数は少ない。

明舞地区では坂道が多いことから自転車の利用は少ない。以前は苦でなかった駅前スーパーへの徒歩での買物が、加齢のため上り坂道を荷物を持って帰ってくるのがここ2、3年つらくなり、バスで地域外のスーパーへ行ったり、地区センターですますことが多くなったという回答者もいた。

尼崎地区では広告を参考に、日によって利用する

店舗を変えており、よく知っているまちの範囲を超えたかなり遠い場所まで自転車で買物に行っており、他地区に比べて利用店舗数が多い。このように買い物という生活に密接な場所がまちの外に点在するため、「自分のまちと思う範囲」の境界をあいまいにしている。複数商店がある市場や商店街を利用しているのも特徴的である。

4) まちのよさ

篠山地区では、城跡や田んぼなどの自然環境を他の地域にないまちのよさとし、まちを自然が残る便利なまちと見ている。ここでいう便利とは、買物という日常生活で不可欠な行動についてであり交通の便がよいというものではない。まちの中に商店やスーパーがそろっており、自転車や自動車に乗れない住民でも特に不自由を感じることはない。人間関係のよさを評価しながらも、一方ではそれをわずらわしく思っているという意見もあった。

明舞地区では空気がよく静かな住みやすい環境としながらも、閉鎖系のまちであるための人通りのなさを、防犯上の問題としてあげていた。篠山地区のような、まち自体に対する強い思いは、ここでは感じられなかった。

尼崎地区では篠山地区とは異なり自然はなくなってしまったが、交通・買物が便利であることを住みやすさの要素としてあげている。また人間関係のよさも住みやすさの条件の1つとしており、人目を気にしない、飾り気のないところをまちのよさとしている。

どのまちも「住めば都」という意見が多かった。

表 3. 買物に使用する施設と交通手段

		徒歩	自転車	車	バス	電車
篠山	スーパーAC	2	4	0	0	0
	スーパーN	1	1	2	0	0
	スーパーS	1	4	3	0	0
	スーパーSI	0	0	1	0	0
	食料品店K	2	0	0	0	0
	食料品店W	1	0	0	0	0
	魚屋S	1	0	0	0	0
	S共同購入	1	0	0	0	0
明舞	スーパーP	4	0	0	0	0
	A駅前スーパーC	2	1	2	0	0
	A駅前スーパーD	0	0	0	1	0
	スーパーOC	0	0	1	4	0
	スーパーK	0	0	0	3	0
	スーパーM	0	0	0	1	0
	スーパーD	0	0	2	0	0
	A市場	3	0	0	0	0
U市場	0	0	0	1	0	
S百貨店	0	0	1	0	0	
S商店街	0	1	0	1	0	
尼崎	N商店街	1	0	0	0	0
	H市場	1	0	0	0	0
	N市場	1	0	0	0	0
	D駅前D	0	2	0	1	0
	スーパーND	2	1	0	0	0
	スーパーL	1	1	0	0	0
	スーパーW	1	1	0	0	0
	スーパーG	3	2	0	0	0
	スーパーA	0	1	0	0	0
	スーパーI	0	0	1	0	0
八百屋M	1	0	0	0	0	

5) まちを出る頻度

個人的に日帰りでまちを出るすなわち、“おでかけ”頻度を図5に示す。ここでのまちとは先述した日常の会話での境界と同様に、1998年度の研究と同様「まち」と意識している範囲とした。

どの地区も月に1~2回程度の頻度が高くなっている。篠山地区では趣味・活動の多くや買物、通院が地域内で行われているため、他地域に比べてまちを出る頻度は低い。明舞地区では出かける頻度は不定・不規則であり、尼崎地区では買物に広範囲に行っていることや、大阪に近いという気安さからまちを出る頻度は高い傾向を示している。

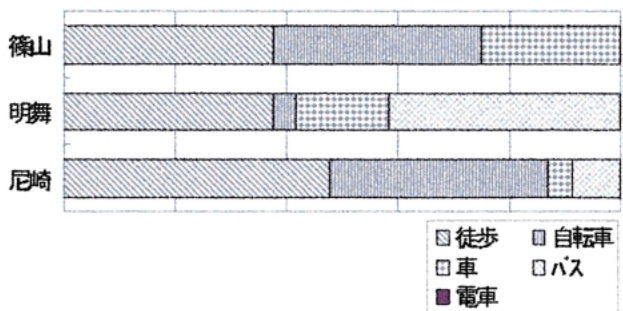


図 3. 買物（食料品）に行く手段

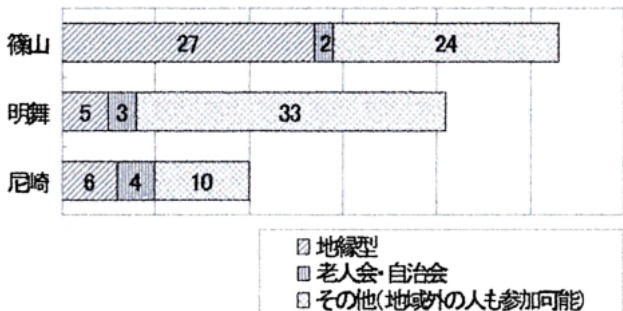


図 4. 趣味・生きがいとなる活動

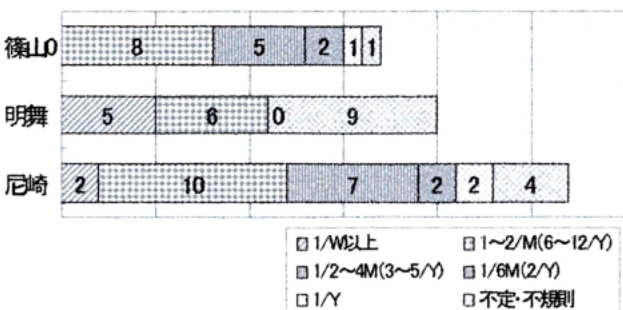


図 5. おでかけ（日帰り）

5. インタビュー調査のまとめ

今回のインタビュー調査によって、性格の異なる3地区での高齢者の日常生活を知ることができた。その結果、インタビュー内容による他人との会話、趣味・活動、まちの外へ出る頻度などから、各個人の生活や地区環境による活動の多様性が確認された。また、機会があれば積極的に活動していこうとする高齢者が非常に多いこともわかった。現在、都市部での高齢者人口が増加している。健康的に加齢するために、住民が自宅に引きこもらず外に出たり、人とのコミュニケーションをはかれるように、まちは押し付けでなく個人が選択できる場所や機会を提供することが必要となる。

6. 住み続けられる「まち」の構造

1997年度から実施してきた高齢者の生活圏の構造に関する調査を通して、住み続けられる「まち」の構造について考察する。

1) 地域生活者

『多様な生活者像』

新市街地形成における計画団地型（明舞）や基盤整備型（尼崎）、古くからの「まち」をベースにした基盤発展型（篠山）など、それぞれの「まち」の形成手法やプロセスによって地域の生活者構成は異なり、また、地域のライフサイクルも異なっている。

生活者が地域で住み続ける中で、まちの構造との関係で地域の生活感、生活スタイルを創り出している。

このように地域生活者は、地域固有の生活者構成の中でそれぞれのコミュニティや生活スタイルを築いており、地域生活者像は「まち」のかたちと切り離すことができない。

住み続けられる「まち」を考える上で、地域の生活者構成や生活感、ライフサイクル等の地域生活者像は「まち」との関係において多様であることを前提にアプローチすることが必要となる。

『元気な高齢者』

元気な高齢者のタイプとして、

- ・ 社会に役立つための活動に積極的に取り組む社会貢献タイプ
- ・ 趣味や文化、レクリエーション活動など生活を積極的に楽しむタイプ
- ・ 近隣ネットワークの中で日常生活を営むコミュニティタイプ

などが考えられる。

地域で生活する元気な高齢者は、これらの活動を日常生活の中に多様に取り入れ、まちの「かたち」に応じて場所の使い方を工夫したり、テーマコミュニティに参加するなど、「まち」を選択的に使っている。

地域の生活者像とともに、ライフスタイルという視点から多様な高齢者の生活像が浮かび上がってくる。

『テーマコミュニティ』

3地区とも趣味やレクリエーション活動等を通じたテーマコミュニティがそれぞれの生活を豊かにしている。

テーマコミュニティでは、基礎的な生活領域とは異なる世界や新たな人間関係を構築することができる。また、テーマコミュニティの中から新たな活動が生まれるなど、生活者の主体性によっては、生活ベースの関わりを超えたより開放的な、より発展的な関係を築き得る。

地域コミュニティの中にも、裁縫や手芸、料理等、テーマによって集まった近隣のグループの関係を核に地域コミュニティがイメージされているケースもある。

2) まちづくりにおける地域特性

『まちの使い方』

スーパーで出会う知人との会話がコミュニケーションの場となるなど、近隣コミュニティの関係性によって場所の意味は異なってくる。

また、提供されたテーマコミュニティの場に参加するか否かによって、その場所の持つ意味は変る。

このように地域の生活感や生活のあり方によって場所の意味は異なる。

また、会話をする場所は、尼崎では自宅やとなり近所であり、明舞では、庭先、道ばた、篠山では公民館が多く、市街地形態や施設配置によって場所の使われ方も異なる。

まちの使い方は、フィジカルなまちの制約の中で、生活ベースで決まっている。

『生活圏の認識』

生活圏の認識は、

- ・ 尼崎：認識圏は狭いが、生活の場所として使っているところは認識圏以外にも分布
- ・ 明舞：幹線道路に囲まれた住区内に限定され、場所の分布も住区内が中心
- ・ 篠山：まちの周縁が田畑により認識され、まちの認識の共有度が高い

であり、まちのエッジにより影響を受けている。

尼崎地区のような開放系のまち（連担市街地）では、エッジが希薄であるため認識圏の共有度が低く自宅を中心とした身近な日常生活の場の広がり個々に認識される傾向にある。

このように「まち」の認識は、利用場所よりも、空間を規定するエッジによってハードベースで規定される傾向にある。

『まちづくりにおける地域特性』

まちづくりにおける地域の特性とは、風土や文化、市街地形態等の個々の要素とは別の次元で地域の生活者像と「まち」との相対的な関係性と見ることが出来る。

地域の生活者がフィジカルな「まち」の中で生活サービスを選択し、場所の使い方を生みだし、活動の中から生活を補い、さらには生活を豊かにしている。

このように地域生活者が地域のトータルな環境をどのように使い、どのようにまちを認識してるか、その関わり方やまちの共有度等の状態を地域の特性ととらえ、まちづくりへの展開を図ることが必要となる。

3) 住み続けられる「まち」の要素

『場所性・サービス・活動』

「まち」の住みよさについては3地区とも、「住めば都」であるとの回答を得た。今まで住んできた「まち」との比較でも、それぞれの「まち」の中で創り出してきた人間関係を含めた総体的なものが「住みよさ」であり、一概に比較できるものではないといった意見が多くをしめた。

身近な暮らしよさは、フィジカルな市街地整備よりも、既成のまちの中で「場所の使い方」「サービスのネットワーク」「地域活動」を地域の生活者像に応じて重ね合わせていくことによって実現すると考えられる。

『プロセスを計画しネットワークする』

地域に対応した選択的なしくみを「重ね合わせ」ていくプロセスとともに、「まちの中」からテーマ型の活動をきっかけに地域のコミュニティをかたちづくっていく手法や「まちの外」からのテーマコミュニティによる働きかけなど、地域の生活者像に応じたテーマコミュニティによるまちづくりの展開が考えられる。

また、都市部の「まち」のまとまりの共有化が希薄な開放系の「まち」では、まちづくりの対象地区を地縁的・空間的に設定することは難しいため、身

近な環境改善の積み重ねを構造化するまちづくりの考え方やテーマコミュニティによるまちづくりの展開など、環境整備のための計画区域を設定することを前提としないまちづくりの進め方が有効である。

このように身近な環境課題の認識から「まち」のしくみを再編していくプロセスが住み続けられる生活圏を構造化する。

7. まとめ

平均寿命が飛躍的に延びた現在、従来の高齢者の概念は意味を持たなくなっている。

「老後」「リタイア」「第2の人生」等の概念は、余生を楽しむという発想が根底にある。

これは雇用体系の延長線上の発想であるが本来、人間にとって「引退」はありえない。

高齢者をこのようなカテゴリーでとらえるのではなく、一人一人が多様な意味で社会を担っているという意識の中で社会に位置づいていくことがなければ充実した老いは迎えられない。

高齢者という一般論で高齢者対策を考えるのではなく、一人一人が一社会人として社会を担っているという発想がまちづくりの中に求められる。

このたび調査した高齢者の活動は、高齢者世代のコミュニティを中心として展開されており、1998年度に調査した子供の生活領域とは「まち」の棲み分けが行われている。

今後は世代間の活動領域を重ね合わせることによって担える「縦社会の生活領域」をまちづくりの中に見いだしていく視点が必要となる。

本調査は、大阪大学との共同調査である。

参考文献

- 1) 平成7年 国勢調査
- 2) 都市及び地域環境の安全性・快適性に関する研究
「高齢者の生活圏の構造に関する基礎的研究」
/平成9年度福祉のまちづくり工学研究所報告集
- 3) 都市及び地域環境の安全性・快適性に関する研究
「子供の生活圏の構造に関する基礎的研究」
/平成10年度福祉のまちづくり工学研究所報告集